
The Prince and an Officer

沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Prince and an Officer

【Nコード】

N7881P

【作者名】

沙希

【あらすじ】

アメリカ、マサチューセッツで学生生活を送るクロエのもとに、母国フィリピンから昔馴染みタカサが訪ねてきた。彼は言う、フィリピンの第一王子リアムが彼女に助けを求めていると。共通の幼馴染であるアビゲイルが誘拐されたというのだ。慌てて国に帰ったクロエはテレビをつけて驚愕することになる。テレビの中のアナウンサーが予想もしていなかったことを報道していた。

タカサ補佐官の訪問

クロエはポストから郵便物を取り出すと、冷たい風に押されるように駆け足でアパートメントの中に入った。

コートを脱ぐ前に部屋に暖房を入れる。リビングのカウチに座ると、手にしていた郵便物を整理する。

クロエはルームシェアをしていたから、ポストに入っていた手紙は自分宛でないものも多い。今日に限っては一通も自分宛のものもなかった。季節は十二月の中旬、クリスマス・カードが飛び交う時期だったから、なんだか少し残念な気分だった。

宛名別に分けた手紙の束をまだ帰宅していないルームメイトたちがわかりやすいよう、リビングの机中央に置く。

クロエはアメリカのマサチューセッツで大学院生として暮らしている。専攻は国際関係学で、将来の夢は両親と同じ、家業ともいえる外交官になることだった。

クロエの大学には世界各国から学生が集まる。彼女自身も東アジアの小国フィリピン出身だ。勉強面は厳しいながら、クロエは国際色豊かな友人たちと楽しい学生生活を送っていた。

母国フィリピンでは貴族の家柄に生まれたクロエは厳しく躰けられ、時にそれを窮屈に思うこともあった。だが両親や周囲の大人たちの目がないここアメリカでは、とにかく自由だった。

一緒に暮らす友人たちとベッドに座り込み、ピザでビールを飲み交わすなんて楽しいことは、アメリカに来てから覚えたことだった。もちろんそれは大変な勉学の傍らにある楽しみだったが。

部屋着に着替えようと自室のドアノブをひねった時、玄関のチャイムが鳴った。宅配便かもしれないし、三人いるルームメイトたちの誰かが鍵を忘れて出かけたのかもしれない。

クロエは玄関付近の出窓から誰がいるのかのぞきこんで、それから慌てて扉を開けた。

そこにはフィリエにいるはずの男が立っていた。

「お久しぶりです、クロエ嬢。リアム王子殿下付き特別補佐官のタカサでございます。どうか突然の訪問の無礼をお許し下さい」

二十代後半ほどの男はクロエに一礼し、完璧な微笑と丁寧な言葉を見せた。男にあわせて後ろに控えるように立っていた者たちも、彼女に頭を下げる。彼らはフィリエの宮殿で王族の世話をする侍従、あるいは女官と呼ばれる人間たちだった。

クロエはタカサという男をよく知っていた。幼い頃はよく自分や幼馴染たちの面倒を見てくれた兄的な存在だったのだ。

クロエはタカサたちの突然の訪問に驚きつつも、部屋の中へ彼らを招き入れる。

「ちよっ、ちよっとなタカサ補佐官っ！」

全員が部屋の中に入りきる前に、クロエは慌てた声をあげた。

アパートメントの中に入るやいなやタカサは、連れて来た侍従たちに部屋の中にある彼女の荷物をすべてまとめるように命じたのである。

「ご安心を、クロエ嬢。下着などは男性に触れられたくないでしょう。そう考えて侍従だけではなく、ご覧のとおり女官も連れてきましたから」

もちろん、そういうことではない。

なぜいきなり訪ねてきて、勝手に荷造りを始めているのか、ということである。だがクロエがあたふたとしている間に、宮殿の有能な侍従たちはほとんど荷物を片付けていく。

「説明を求めますっ！タカサ補佐官！まさかあなたは私の荷物が目的でここに来たわけではないのでしょうか？説明なしに私は^{わたし}一步も外には出ません！」

そのクロエの言葉は本人の動揺とは裏腹に、強い意志がこもった毅然とした響きがあった。

薄茶の瞳が鋭くタカサを睨む。

だが睨まれているというのに、タカサは嬉しそうににっこり笑った。

その笑顔にクロエは氣勢をそがれる。

「何を笑ってらっしゃるんですか？」

「いえ、クロエ嬢。私は嬉しいんですよ。あなたがそのように気の強い女性で」

なんだか貶されている気がしないでもない、クロエがどう返事をしたものかと躊躇っているとタカサが笑顔を消し、彼女の前に膝を折った。

「クロエ・サラハン・クワンポンさま、我が主があなたの助けを必要としています。リアム王子殿下が置かれている状況は深刻であり、一刻も早い対応が求められています。そして殿下はご自身を救えるのはあなたしかいないと考えておられます。どうか殿下をお助け下さい」

真剣な表情で懇願するタカサを目の前にして、クロエはさらに混乱した。

彼女はフィリエで大貴族の娘として生まれた。タカサの主人であるリアム王子とは同い年であることから、幼い頃は彼のご学友として一緒に遊んだ。いわゆる幼馴染である。

そしてクロエと王子の関係はそれではなかった。

だがその関係を知る者はごく一部でしかなく、彼女自身に一国の王子を救うような力はない。確かに貴族としての人脈は持ち合わせていたが、クロエは所詮、学生の身分である。何事にも限界があった。

というのがクロエを少し調べれば見えてくるものだ。

タカサは、いや王子は自分の『何』を求めているのだろうか。

「……………タカサ補佐官。殿下が何にお困りなのかわかりませんが、

私には殿下を救う力はないように思います。ただの学生ですから。クワンポン家の力を借りたいというのであれば、フィリエにいる父が私に変わって喜んで殿下のお力になるでしょう」

クロエはタカサの反応をうかがった。

彼は静かに微笑むと、周囲を確認し、声の大きさを落として言った。

「クロエ嬢、殿下はフィリエ国家警察特別捜査官としてのあなたを必要としているのです。『四人の花嫁候補』の一人アビゲイル様が失踪しました。殿下は誘拐であると考えておられます」

タカサ補佐官の訪問（後書き）

こんにちは。

『THE PRINCE AND AN OFFICER』の第一話を読んで下さって

ありがとうございます！

今回のお話しは自分としてはかなり

お遊び満載の楽しい気持ちで書いています。

皆さんに楽しんでいただければ嬉しいです。

ちなみにこのお話しでは、実在する団体名・国名等がたくさん出てきますが

全部フィクションなので、よろしくお願いします！

婚約報道

『明日のこの時間は番組内容を変更し、リアム王子殿下とそのご婚約者クロエさんのご婚約会見を完全独占生中継いたします。第一王位継承者であり、一昨年から闘病生活を送られている国王陛下に変わりご公務を勤められている殿下は、その優しく気さくなご性格から国民からの人気が高く、今回のご婚約の報を受けて、フィリエ各地からお二人を祝福する声が上がっています。また今晚7時から連続テレビドラマ『チョコニスの恋人』第7話の放送を延期し、リアム王子殿下のご婚約を祝う特別番組を放送する予定です。殿下の幼少の頃からの映像や、ご婚約者クロエさんのお人柄、またお二人のなれそめに関するエピソードなどをお伝えしますので、ぜひご覧下さい。それではご婚約者クロエさんが小学校時代を過ごされたフィリエ南部の地、ウサマでお二人のご婚約を祝う市民によるパレードが催されているようです。現地のチエン・アナウンサー？チエン・アナウンサー、聞こえますか？』

電波の状態が悪いのだろうか、ニュース番組の女性キャスターは現地取材にむかっているアナウンサーの名前を数度呼び続けた。すぐにテレビ画面はテレビ局内のスタジオから変わりパレードの様子が映し出され、その後そのニュースは滞りなく放送された。

だが電波の不具合でアナウンサーやテレビ・クルーたちが慌てようと困るうと、今の彼女にはそんなことはまったく気にはならなかった。

「……………殿下、これはアビゲイル奪還に必要な作戦なのですか？」

クロエは狼狽した様子で、その部屋の中央に陣取る大型テレビを見つめる。

テレビ番組は延々と、とある国の王子の婚約を祝うニュースを流し続けていた。

クロエのその言葉に青年は眉をよせた。そしてなぜかその表情はどこか呆れた様子だった。

「いや、殿下、すごいですよ。『チヨニスの恋人』を押しつけて、殿下のご婚約会見を中継するとは！殿下はご存知ではないかもしれませんが、このドラマ、視聴率50%以上を取ったっていつて、ちまた巷ではとても流行っているんですよ」

クロエの声を無視して、青年の隣に立っていたタカサ補佐官がその口を開いた。腕を組み、感心した様子でテレビ画面を見ている。そしてその表情はどこか楽しそうだ。

「それは私も知っている。人気を受けて、映画化も決まっているのだろう」

青年は至極真面目に返す。

「ほう。殿下もなかなか俗世に通じていらつしやるんですね。補佐官として長年殿下のお傍に控えておりながら、存じ上げませんでした。」

「精進しろ」

からかい混じりのタカサの言葉に対して、青年はあくまで生真面目に、短く答える。

青年のそのスリーピースのスーツ姿はただ執務椅子に座っているだけで、さまになっていた。ファイリエ人らしい黒髪は短めにカットされており、清潔感ある形で保たれている。加えて微笑めば、さぞ女性たちの心をつかむだろうとかがわせる顔立ちだった。

だがこの青年の美麗な顔も、クロエにとってはその見慣れた顔の一つでしかない。

「わつ私を無視しないで下さい！！殿下っ！そしてタカサ補佐官、これは一体どういうことなんですか？アメリカから戻ってみれば、いきなり婚約発表だなんて。まったくそんな話し、聞いていません！！！」

自分を無視する二人に腹を立てて、クロエは青年が陣取る机に勢いよく両手をつく。パンツと音が立ち、机の上にまとめられていた書類が崩れた。

「クロエ、はしたないぞ。それと君の疑問だが、私たちは6歳の時から婚約している。今回の婚約発表は実質的には結婚発表だ。まだ日付は決定していないが、近日中に結婚の日取りも公にする」

「そんな子供の時の話し、持ち出さないで下さい！」

青年の言葉に女性

クロエは文字通り、頭を抱えた。

一体全体、どういう理由でこんなことになったのだ。
わけがわからない。

どうしてさつきからテレビや新聞、ありとあらゆるこの国のマス・メディアは自分の名前と目の前の青年、フィリエ王国第一王子リアム殿下の名前をセットにして報道しているのだろうか。

クロエはマサチューセッツで大学院生として暮らしていた。

真面目に大学に通っているし、勉強は欠かさない。それは真実だった。

だから彼女は自分が大学院生という身分を隠れ蓑にフィリエ国家警察の捜査官として働いている、なんて言いつもりはない。上司に知れば怒られるだろうが、彼女は学生業と警察業を兼業しているつもりでいた。

だがそれでも彼女はその任務の性質ゆえに、捜査官であることを隠して生活していかなければならなかった。

家族、友人、一緒に暮らしているルームメイトたちさえ、クロエが捜査官であることを知らない。

けれど蛇の道は蛇である。

国家警察を動かす力のみならず、私的な特殊捜査官を有するリアム王子なら、クロエがアメリカで大学院生生活以外に何をしているかなど、調べるのは容易かったであろうと思う。国王が病で倒れて以来、国家元首と同等の力を持ち始めた王子ならなおさらだ。

タカサ補佐官はクロエに言った。リアム王子とクロエの共通の幼

馴染、アビゲイルが誘拐された。

彼は事件の詳細を詳しくは語らず、幼馴染が誘拐されたという事実に帰国を承諾したクロエを引きずるようにして国家専用機に押し込んだ。詳細は王子から直接聞くようにと、タカサは決して口をわらなかつた。それでもクロエがまさに着の身着のまま、飛行機に乗ったのは幼少期から思春期の大部分を共にすごした友人である王子を、そして何よりアビゲイルを救いたかつたからだ。こんな強引なやり方でクロエをフィリエに連れ戻すのだから、よほど事態は深刻なのだろうと思ひ、大人しくタカサの指示に従つたというのもある。

「殿下が捜査官としての私を必要としていると思つたからこそ、私はフィリエに帰つて来たんです」

詳しいことはわからないが、アビゲイルをよく知る者として、また特殊訓練を受けた捜査官として、搜索に尽力することが求められているのだと思つて、クロエはフィリエに帰つてきたのだ。

興奮して疲れたクロエは、今度はしょんぼりしたようですで、リアム王子の執務室にある豪華なソファに倒れこむように座つた。

「もちろんだ、クロエ。私は特殊訓練を受けた人間を必要としている。そしてそれは君だ」

王子の言葉に、クロエは顔を上げる。

幼い頃から王子には非公式ながら四人の花嫁候補がいた。その内の一人がクロエであり、そして彼女は昔、その最有力候補でもあつた。クロエの家は由緒正しい貴族であつたし、幼い頃は王子の一番

のお気に入りのお友達だった。

だがそれは当人たちが幼い頃に大人の思惑で決められたものであり、クロエ自身、18歳でアメリカへの留学を決意した時から、自動的に自分はその枠から外れたと思っている。彼女は高校を卒業すると同時に、国家警察の捜査官として働き始めていたのだ。未来の王妃様が拳銃片手に犯罪者と戦うというのは非現実的だろう。

付け加えるならばフィリエの王族の慣習では、未来の王妃となる女性は国内にあるとなる有名女子大学で学ぶことになっている。実際、クロエ以外の3人の候補者はその大学を卒業している。

非公式に選出された『四人の花嫁候補』は法的にはなんの力も根拠もない。だがその四人は王家との力関係を考えた時、最も婚姻に障害のない花嫁候補たちだった。

しかし時代は21世紀をむかえて十年余りがたっている。混乱はあるだろうが、それでも王子には花嫁を自分で好きなように選ぶ権利があるし、花嫁たちも将来を誓い合うに相応しい相手を自身で見つけ出してきたても誰も文句は言わない。

実際今年の春、残された三人の候補者のうち二人がそろって恋愛結婚をした。クロエも幼馴染二人の結婚を祝うためにアメリカから一時帰国し、結婚式に出席した。

残された花嫁候補はたった一人。残されたうち一人はその気弱な性格から最も花嫁にふさわしくないと言われていた娘、アビゲイルだった。

リアム王子はアビゲイルを花嫁に選ぶことはないだろう。

そう言ったのは誰であったかクロエは覚えていない。

しかしそれはクロエも同感であった。王子を思っただけのものではない。彼女のことを思っただけの気持ちだった。あの優しく、平穩を好

むアビゲイルに未来の王妃は重責すぎる。幼馴染として彼女をよく知る王子も、同じ気持ちだろう。それに彼は彼女を妹のように思っていた節がある。

だから時を待てば王子は、彼に相応しい相手を自然な形で、恋愛という形で見つけ出すのだろう。

それが『四人の花嫁候補』の存在を知る人間たちの見解だった。もちろん事実上、王子に花嫁候補がいなくなったことで、王室関係者の中には新しい候補者を探さねばと慌てている者もいるようだが、それは今となってはクロエには関係のない話だ。

しかし、それがどうしてこうなった。

捜査官の助けが必要だという王子の要請を受けて国に帰ってみれば、自分は王子の婚約者だという。

実は王子が緊急に花嫁を必要とするような事態が起き、自分にお鉢が回ってきてしまったのかとも思ったが、王子の言葉から推測するにそうでもないらしい。

「一体、何があつたんですか？」

「一ヶ月前、私が公務から自室に戻ると、アビゲイルが私の寝室にいた」

「……………はっ？」

それはあまりに予想外の言葉だった。

「殿下の寝室にアビゲイルが……………」

「そうだ」

「……………アビゲイルがつ!?!?」

クロエは立ち上がって叫んだ。

アビゲイルは家柄もよく美人だが幼い時から内向的で、気弱な子だった。反面、気の強いクロエは幼い頃は彼女を引っ張るようにして遊んだものだった。

そんな娘が王子を誘惑しようとベッドにもぐりこんでいたと言っただろうか。そんな姿はクロエにはとても想像できなかった。

「えっ？ちょっと待って下さい！アビゲイルが殿下のベッドに忍び込んだことは驚きですが、どうしてそれがどう誘拐と結びつくのですか？」

「……………誰もアビゲイルが私のベッドの上にいたとは言っていない。彼女はあくまで、私の寝室にいただけだ」

王子は呆れたように溜息を吐く。

裸身のアビゲイルが王子を誘惑する図を脳裏に思い浮かべていただけに、クロエは自分の勘違いに顔を赤くした。

「殿下、確かに殿下は嘘をおっしゃっていませんが、その言い方ではクロエ嬢が勘違いするのも無理はありません。過去にそう言うことがなかったわけでもありませんし」

「タカサ、余計なことまで言うな」

王子が一喝する。

クロエはタカサの言葉の後半部分が気になったが、とりあえずそ

れは無視することにする。

「あのでは、どうしてアビゲイルは殿下の部屋に？」

「彼女は私に密告と、そして父を助けて欲しいと懇願しに来たのだ」

婚約報道（後書き）

（2011年1月10日、修正をしました）

アビゲイルの密告

一ヶ月前、リアム王子がその日一日の仕事を終え、寝室の扉を開けると、そこにアビゲイルが立っていた。

過去に女性から夜這いをかけられた経験のある王子は一瞬、まさかと思った。しかしその考えは、アビゲイルの次の行動ですぐさま打ち消された。

彼女はすばやく王子の足元に跪くと、寝室に無断で入ったことを謝罪したのである。

その表情はとても夜這いに来たような女性のものではなく、今にも気を失いそうな青ざめたものだった。元々線の細い女性だったから、王子の目には彼女がすぐにも入院が必要なように見えた。

「王子殿下、お久しぶりです。殿下の寝室に勝手に足を踏み入れた無礼、どんなお咎めも覚悟しております。申し訳ございません。ただ兵を呼ぶ前に、どうか私の話しを聞いてください」

彼女はそう言うと王子に言葉を挟む隙を与えず、そのまま喋り続けた。

「実は一ヶ月ほど前から私は、ある者から脅迫を受けています。その者の要求は今後一切殿下に近づくな、というものでした。逆らえば命はないと。はじめてそんな文面が我が家に届いたときは、ただのいたずらだと思いました」

王子は真夜中の突然のアビゲイルの訪問に心底驚いていたが、彼女の話す内容に恐ろしいほど真剣な表情をし、彼女の話に耳をかたむけた。

「殿下にこんなことを申し上げるのも心苦しいのですが……私
は昔から、殿下の幼馴染という立場からやっかみを周囲から受ける
こともありました。ですからそれもいつもの心ない悪戯の一つだと
思ったのです」

王子は微かに表情を動かした。

彼はアビゲイルやクロエ、またタカサといった幼い頃から自分の
『ご学友』として傍にいてくれた人間たちが、自分のために少な
らず傷ついていたことを知っていた。

リアム王子は国王夫婦のたった一人の子供であり、この世に生ま
れたその瞬間からプリンスとして国中の注目を集めている。

成人し、第一王子としての公務に就いて以降、幼馴染の彼らとは
一定の距離があった。それは幼い子供たちの友情の築き方と大人同
士の付き合い方の違いと言ってしまうえばそれまでだ。だがそれとは
別に、お互い意図的に線引きをしていたのも事実だった。

しかし当人たちの配慮もむなしく、アビゲイルの口ぶりでは状況
はさほど昔と変わっていないかったのかもしれない。

「もちろん父には相談したのですが、父も気にすることはないと
笑ってすぐにその手紙は捨ててしまいました。しかしその後すぐに
2通目の手紙が来ました。そこに……」

顔色は優れないものの、はっきりと言葉を述べていたアビゲイルとが突然、言葉尻を濁した。

「どうした？」

「大変言いにくいのですが、殿下は……………私と結婚する気はありませんよね？」

「君の素晴らしさはよく知っているつもりだが、それでも私は君と結婚することはない。君に王子妃は荷が重いだらう。」

王子の返答に躊躇いはなかった。彼は国民に対して誠実で気さくな優しい王子として知られている。それは真実だったが、彼をよく知る者からすれば大生真面目の大正直者である。女性に対するほめ言葉を忘れてないのはさすがと言えるかもしれないが、この返答では怒る女性も多いだらう。

だがアビゲイルは怒らなかった。

しかし彼女は涙し、放心したように呟いた。

「ではソフィアは勘違いで殺されたんですね……………」

「殺された？どういうことだ?!」

静かな寝室に王子の声が響く。

アビゲイルはその声にはっとしたように顔をあげ、両手で涙をぬぐって説明しだした。

「一通目の手紙を捨てた後、しばらくして二通目の手紙が届きました。二通目の手紙には私が『四人の花嫁候補』の最後の一人であると言及されていました」

「その者は『四人の花嫁候補』のことを知っていたのか？」

「はい。それを読んで、急に怖くなりました。殿下がよくご存知のとおり、『四人の花嫁候補』は非公式なものです。その存在を知っている人間は当事者である殿下や私たち含め一部の王室関係者のみ。それで王室のほうに知らせたほうがいいのではないかと父に言ったのですが、父は偶然『四人の花嫁候補』を知った者の悪戯だろうと。だいたい気弱な私が王子妃に選ばれることはないのだから、何も問題はないと笑って。正直、私もそう思いました。ただこの手紙には殿下が『四人の花嫁候補』から花嫁を選ぶ意思があると」

アビゲイルは無地の白い封筒を王子に手渡す。

「手紙は二通あるようだが」

「もう一通は……私に昔から仕えてくれている侍女、ソフィアが死んだ後に届きました。彼女は二通目の手紙が届けられてから三日後に、ひき逃げにあって……即死でした」

王子は慌てて封筒から手紙を開ける。一通は黒字でびっしりと書かれており、そこには『四人の花嫁候補』から王子の花嫁が選ばれるようだが、絶対に王子からの申し出を受けてはならないと書かれている。

そしてもう一通を、王子は口に出して読んだ。

「『今度はお前の父を殺せば、本気だとわかるのか?』」

まるで推理小説だ。

王子はそう思ったが、それを口にはしなかった。アビゲイルのよ
うすから、彼女が亡くなった侍女を心から悼んでいると思っただから
だ。

「アビゲイル、君はこの手紙の送り主、いや君の侍女を殺した犯人
が本気だと確信したんだね」

「はい……。殿下、一人が亡くなりました。悪戯だと思って
すぐに行動を起こさなかった私に責任があります。ですが、どうか
どうか私を、父をお助け下さい！それから殿下の周辺の警護を強化
なさって下さい！！きつとこれには何か、裏があります！」

そう言っアビゲイルは深く頭を下げた。

「もちろんだ、アビゲイル。今、ナナザキ伯爵はどこにいるのか
い？それに君がこうやって私に会いに来たことを、伯爵は知っている
のか？」

ナナザキ伯爵とはアビゲイルの父のことである。

「いいえ。父には知らせませんでした。手紙の内容からして、お
そらく我が家に仕えている者が犯人とつながっているのではと考え

ました。ここにきていることは誰も知りません。それから殿下、こ
の中に我が家で雇っています者たちの履歴書が」

差し出されたのはUSBメモリだった。

王子はそれを受け取って、感心したように言った。

「アビゲイル、幼馴染ゆえの言葉だと思って許して欲しい。だが
君にこんなに行動力があるとは思っていなかった。ずいぶんと準備
がいい。私はてつきり、君が恐怖のあまりに私の所に身一つで逃げ
込んできたのかと思ったよ」

「殿下、人は成長します。それに覚えてらっしゃいます？昔、ク
ロ工たちと探偵ごっこをしたことを。もうずいぶん昔ですが、クロ
工が教えてくれたんですよ。何事にも証拠が必要だと」

自然と二人の視線が柵の上に飾られていた写真立てに向かう。
そこには幼い少年少女たちの笑顔があった。真ん中で微笑む幼い
頃のリアム王子の隣には共通の幼馴染クロ工がいる。彼女もまた同
じように幼いが、それでも今と変わらず明るい笑顔が浮かんでいる。

「
ところで別に怒っているわけではないが、どうやっ
て君はこの部屋に入ったんだい？この宮殿の警備はそんなにずさん
なのか」

「簡単です。この宮殿は観光客の散策ツアーを受け入れてますで
しょう。昼間それに交じって中に入って、あとは小さいころに遊ん
だ庭ですから、この宮殿は。小さい頃、クロ工を先頭にして宮殿の
中を探検して、大人たちに怒られたりしましたね。とっても楽しか

った」

そう言っつて今晚はじめてアビゲイルは王子の前で小さいながらも笑みを見せた。幼い頃の日々は今となつては優しく、まぶしい子供時代の思い出だ。

王子もつられて唇の端をあげる。だが警備の強化の必要性をさらされていることに気づき、心の内にそれを書き留めた。

それにしても、クロエの影響力には驚かされる。王子はずっと昔から、クロエの行動には目を見開かされていた。幼い頃の勇敢さも、高校卒業後、あっさりアメリカ留学を決めてしまった決断力にも。ぶれない彼女に自分たちはそれぞれ、少なからずとも影響されているのだろう。

「確かに散々怒られたものだが、今思えばあのクロエのお転婆が役に立っているのだな。私もあの頃クロエに教えられた方法で、いまだにリー侍従長を出し抜いている」

王子の言葉に、アビゲイルは今度こそ笑顔を見せた。

だがそれは王子が最後に見た、アビゲイルの笑顔だった。

アビゲイルの密告（後書き）

（2011年1月10日、修正をしました）

不透明な犯行動機

「ナナザキ伯爵の屋敷は危険だと考え、すぐタカサに命じてアビゲイルと伯爵が身を隠せる場所を確保させた。そして彼女には私の護衛官二人をつけ、グシャール駅近くのその部屋に送らせた」

リアム王子はたんと状況説明をする。だがそれが彼の怒りを表していた。

王子の話聞くクロエの表情は真剣なものだ。そこにいるのは幼馴染の失踪に心を痛める女性でも、突然王子の婚約者に仕立て上げられ混乱する女性でもなかった。捜査官としてクロエの頭はめまぐるしく動いていた。

「しかし無事にアビゲイルを送りとどけたという護衛官からの連絡がなく、確認のために別の兵を送った。そしてすぐに護衛官二人の遺体がグシャール駅近くの裏道で発見された。アビゲイルはその場にいなかった」

彼は護衛官二人の遺体が発見されたという報告を受けた後、すぐに周辺を探らせた。タカサがアビゲイルを匿うために用意したグシャール駅近くの家に彼女はおらず、どこからも彼女の存在は

遺体としても見つからなかった。

だが彼女が生きている可能性はある。アビゲイルが死んでいるなら護衛官二人と一緒に遺体が見つかってもいいはずだからだ。もし

犯人が犯行を隠そうとするなら、アビゲイルだけでなく、護衛官二人の遺体をそのままにはしておかないだろう。遺体というものはそれだけで、犯人逮捕の手掛かりになるからだ。そして護衛官の遺体が現場に残っていたということは犯人が生きているアビゲイルを連れ出すのに精一杯で、護衛官の後始末まで手が回らなかったと考えられる。少なくとも、王子はそう信じている。

王子はタカサ補佐官や信頼できる数名の部下に、アビゲイル捜索と共にいくつかの指示を出した。

「殿下の命を受け、アビゲイル嬢に脅迫文を送った犯人を探りました。結果、これはナナザキ伯爵宅に勤めるナガンという男だとわかりました。しかし彼は主犯ではなく、ありきたりですが金をつまらせた行動だったようです。彼は言われた通りに手紙を書き、それをアビゲイル嬢の手に渡るように手配しただけでした。またナガンにそれを依頼した者は若者の不良グループで彼らもまた、誰かに雇われた上での行動です。この者たちからはそれ以上のことは聞き出せませんでした。もしクロ工嬢がお会いになりたければホーゲル留置所に全員おりますので、直接の会話が可能です。そしてアビゲイル嬢の侍女であったソフィアが亡くなった事件のひき逃げ犯ですが、こちらの手が一步届かず五日前の夜、ユガン市内で心臓発作らしき症状を出し病院に緊急搬送され、そのまま亡くなりました。詳しい内容は死亡解剖の結果待ちですが、医師の見立てでは普通の病死ではないと。薬物による死であろうということですよ」

タカサ補佐官が言っていることはつまり、現段階では主犯を確保するための手掛かりも何も得られていないということに等しい。

「何か犯人からの連絡は？あるいは目星はついているのですか？」

クロエの疑問は現在の状況において最も重要なことである。しかし彼女には王子の答えが簡単に予測できた。今、自分がここにいる理由を考えれば答えは簡単だったからだ。

「残念なことになにもない。私の護衛官二人を殺害した犯人らしき人物も、ナナ湖で遺体として上がっている。事情聴取をしたくても実行犯たちは皆、すでに口封じされている」

王子のその低い声は怒っているようにも聞こえた。

「では殿下、いくつか質問することをお許しください。お話しを聞いた限りでは、犯人の目的が大変不透明のように思われます。アビゲイルへ届いた脅迫文から考えれば、殿下の花嫁候補として事件に巻き込まれたようですが、それは真実なのでしょうか？仮定として王子の結婚を阻む意図のある者の犯行として、何か心当たりは？また王子はアビゲイルを花嫁とする旨の発言を以前、どこかでされたのですか？」

クロエの質問は矢継ぎ早だったが、王子は焦ることなく返答する。彼女の質問は王子も考えたことだったのだろう。

「まず犯人の動機だが、私も君の考えと同様、私とアビゲイルの

結婚を阻むのが目的、ということには懐疑的だ。曾祖父の時代ならともかくとして、王妃となる者の家が王家との婚姻で大きく栄えることはない。娘が王子と結婚したからといって、国の官僚として優遇されるわけでもないし、国会で首相に任命されることもない。ビジネスをやっている株価が上がる、なんてことはあるだろうが、逆に何か問題を起こせば必要以上に叩かれることになる。今時、自分の娘を王妃にしたいと思う親は少ないだろう。なにせ君もどこかで聞いたことがあるかもしれないが、王室内部の者は王妃となってくれる娘を探すのに今まで必死になってきた。どの家も娘を王妃にすることに否定的らしいからな。『四人の花嫁候補』が候補者たちの結婚や留学で有名無実のものとなった以降、私もだいたい尻を叩かれたものだ」

そうやって王子はちらりと隣に立つタカサを見る。

「王子は公務を精力的にこなされていますが、ご結婚のことに関してはあまり口にされませんでしたから。ですから少しばかり、ご意見申し上げただけです」

王子の遠まわしの批判を受けて、タカサは苦笑した。

リアム王子はこのフィリエという国において絶対的な人気を誇る25歳の青年である。フィリエの若い女性の間では結婚したい男性の理想像としても語られ、彼が写る雑誌は飛ぶように売れている。そのためパラッチに始終囲まれる生活を送っていたが、それでも彼には浮いた話の一つもない。まさしく清廉潔白な王子像を貫いているわけだが、実は一部の王室関係者たちはあまりに清く正しい生活を送る彼に頭を悩ましていた。

王子はこの国のたった一人の王子。一人っ子の彼の周囲では彼に早い結婚を望む声が多かった。はっきり言えば、世継ぎを作れということである。

人気の高い王子であるから、さぞ花嫁候補は多いだろうと思われるが、実際、花嫁候補に名乗りを上げるものはなく、それとなく王室関係者が声をかけても断れるばかりだった。

皆、知っているのだ。リアム王子との結婚は未来の王妃となる『王妃』という職業への就職だと。その職業選択はどんな女性であっても尻込みするだろう。

「『四人の花嫁候補』のうち三人が候補から外れて、関係者のみなさんも慌てることになったのでしよう。殿下が悠然とかまえてらっしゃるから」

クロエは少しだけ微笑んだ。王子とタカサ補佐官のわずかなやりとりで、十分彼らの間で一悶着あったのだらうとかがえたからだ。王子の結婚に関してはクロエたちが候補者から外れたせいで彼が困っている、という考え方も出来たが、彼女自身はそうは思っていない。確かに自分は『四人の花嫁候補』の一人だった。だがそれは何の意味もない。王子は昔、言っていた。結婚相手は自分自身で探す。

「私は私なりの考えがある」

「はい」

クロエの言葉に王子は重々しく返答し、彼女は笑いをかみ殺して
一つ頷いた。

話しがそれってしまったことに気づいて、王子は軌道修正をする。

「それで、私とアビゲイルの結婚を阻む者の犯行だと仮定して考えてみての話のだが、王室反対者の犯行、娘を王妃にしたいという時代錯誤な親の犯行、あるいは愉快犯による犯行、それぐらいしか犯人像は思いつかない。可能性が高いのは愉快犯か王室反対者による犯行だろうが、だとしたら何の犯行声明もないのはおかしい。そしてそもそも、私はアビゲイルとの結婚を口にしたことはない」
「ではどうして、アビゲイルと殿下が結婚されると犯人は思ったのでしょうか」

「確信はないが、どうも王子妃候補をなかなか見つけることができず、リー侍従長が『四人の花嫁候補』のうちから花嫁を出せないか、といったような内容のことを口にしたことがあるらしい」

今年の春以降、『四人の花嫁候補』は事実上、アビゲイルだけになった。王子の早い結婚を望む侍従長が思わずそんな本音をどこかでもらしてしまったのかもしれない。そして侍従長の言葉は内外で王室の公式見解として捉えられることも多い。

「だがリー侍従長を責めることは出来ない。似たようなことを、私は他の者から言われたことがある。アビゲイルとの結婚を考えてはどうか。
クロエ、君をアメリカから呼び戻すことはできないのか、などと」

王子の最後の言葉はクロエにとって意外であった。リアム王子人気で王室は比較的、メディアや国民の前に姿を現すことが昔に比べて多くなった。王子はテレビのバラエティー番組に出演したことさえあり、かなりの柔軟な性格の持ち主であると言われている。反面、その王族を支える王室関係者たちは保守的だ。王子が清廉潔白な王子でい続けるのも、そんな彼らと軋轢を生まないためだとも言われている。

しかしそんな保守的な彼らが、花嫁候補としてクロエを考えていたのには驚いた。彼らが求めているのは究極のレディだと思っていたからだ。いくら貴族の娘とはいえ、アメリカ留学後のクロエは彼らの求めるレディ像とは異なっている。拳銃や刃物の使い方に慣れ、一般的な成人男性一人ぐらいであれば軽々倒すことの出来る女性をレディとは言わないはずだ。もちろん彼らはクロエが警察官であることを知らないのだから、それを置いてもクロエは残念ながらレディではない自覚があった。だが彼らがクロエの名を口にするぐらい、王子の花嫁探しは難航していたのかもしれないが。

そしてこの事実はこの事件においてはもう一つの可能性を導くことになる。

「それは私が標的にされた可能性があるということでしょうか？」
「それはわからない。だが逆にどうして君が標的にならなかったのか。犯人は君が警察官であることを知っているのではないか、とも考えられる。警察官が、しかも特殊捜査官の任務に就くような人間が王妃なるようなことはない、という先入観を持ったのかも知れない。それにも知っていれば警察官に脅迫状など送らないだろう」

王子の言っていることは推測でしかないが、納得できる説明ではある。

「そうですね」

クロエは頷き、頭の中で情報を整理した。

そしてここまで王子の話しを聞いて、ようやく納得が出来た。なぜ自分がフィリエに連れ戻されたのか。

「殿下、つまり私の役目は王子の婚約者という囿ですね」

犯人の目的は不明だ。だが真の目的が何であれ、アビゲイルが王子の花嫁候補としてさらわれたというのなら、『真実の花嫁』を公にすれば、犯人が何か動きを見せるかもしれない。そして犯人が『四人の花嫁候補』の存在を知っていた以上、クロエがその役を演じるのが適任だ。

「そうだ。君にろくな説明もせず、婚約発表をしたことはすまないと思っっている。だが正直に言うと、この状況で信頼できる相手が極端に少ないのだ。情報は限られた場所で、人目のない所で共有したかった。おそらく王宮内部にも犯人とつながっている人間がいる。でなければどうして我々の手が届く寸前でこども証拠を取り逃

がす。幼馴染の君にこんなことを頼むのは気が引ける。だが私が受けた報告によれば、君は優秀な警察官だ。クロエ、私に協力してくれないか？」

正直、クロエは王子のことをずるいと思った。すべてを整えた後の、事後承諾だなんて。しかも彼はお願いを口に行っているが、彼女に拒否権なんてものは最初からない。彼は王子なのだ。

「もちろんです」

だがクロエの返答に躊躇いはなかった。それは彼女にアビゲイルを救いたいという気持ちがあるからであり、また第一に王子が言うように彼女は警察官だった。人命を救い、社会秩序を乱す者を取り締まる。それが彼女の仕事だ。

「殿下、私が囹を務めることに異論はありません。しかし、殿下は私が婚約者として動くことで、アビゲイルの身に危険が迫る可能性についてはご承知で？」

もし本当に犯人がアビゲイルを花嫁候補として勘違いしていた場合、彼女がそのまま殺されることは想像に難くない。

「覚悟の上だ」

王子の表情は少しも動かなかった。

「正直、君を花嫁として公式発表したことは最後の賭けにも近い。アビゲイルが失踪してから一ヶ月、私たちは持てるすべての力と知恵で、彼女の居場所を、そして犯人の目的を捜査してきた。だが結果として、ひき逃げ犯と護衛兵二人を殺した者は私たちの手が届く前に殺され、彼女の足取りはいつころにつかめない。そして主犯からは何の連絡もない。このまま時が過ぎれば不慮の事故にあった女が一人、通り魔に殺された王宮兵が二人、貴族の娘が一人蒸発ですべてが終わってしまう。だが私はこのまま終わらせるつもりはない」

それは何としても、アビゲイルを取り戻す、という意思表示にも聞こえた。

だがクロエにはわかっていた。王子はすでにアビゲイルが死んでいる可能性を考えていると。

アビゲイルの失踪から一ヶ月。統計学的に見ても、誘拐された女性が無事である可能性は低い。もし生きていたとしても、何の手掛かりもない状態ではどうしようもない。

だからこそ、王子は決断したのだ。

「わかりました。全力で務めにあたります」

「ありがとう、クロエ」

王子はクロエの前に右手を差し出した。彼女は王子の手を固く握

り返す。

「いえ、むしろ私を呼んで下さって感謝しています。私もアビゲイルを助けたいですから。それから私を信用してください。ださってありがとうございます」

王子は言った。信用できる人間が少ないと。だが彼はクロエをアメリカから呼び出した。

リアム王子は少し驚いたように目を見開き、そして微笑んだ。

「……………ああ、君を信用している。君は誰よりも信頼に値する人間だ」

そして王子は右手とあいていた左手でもってクロエの手をつつんだ。

なんだか昔もこんなふうに王子に手をつつんでもらったことがある気がして、クロエは懐かしくなった。

クロエの顔にも自然と笑みが浮かぶ。

「では話しがまとまったところで、明日の婚約会見の

段取りに入りましょう」

咳払いと共に二人の間に割って入ったのは、リアム王子の優秀な補佐官タカサだった。

会見の後

フィリピンは東アジアに浮かぶ比較的小さな島国だ。人口は二千万人程度で、主に電子産業で栄えている。今まではどちらかと言うと、世界企業の下請け会社会的な位置づけにいたることが多かったが、近年ではフィリエ・ブランドでの国際競争力を身につけ始めており、世界の豊かな国の一つである。

そして疑う余地のない民主主義国家だが、他国の立憲君主制と比べても国王の発言力が強い国だった。同時に国民の王室に対する関心が高い。それは歴史的、政治的流れの結果とも言えるが、現在に關して言えばリアム王子の存在が大きい。若く清廉潔白で、しかも美しい王子のプロマイド写真がどんな人気アイドルより売れるというのはフィリエでは有名な話だった。

だからこそ、王子の婚約報道に国中がわいた。ハンサムな王子の結婚に一部の熱狂的なファンは悲鳴を上げたが、婚約者クロエ嬢は大変好意的に受け入れられている。フィリエ国営テレビが取った緊急アンケートでは、彼女は国民から90パーセント以上の支持率を得ている。代々外交官を務めているクワンポン公爵家の長女にして、王子の幼馴染。高校を卒業後、アメリカで勉強を続ける才媛で、4ヶ国語を話す。

二人の婚約会見が生中継されている中、王子の横で微笑む彼女は若く美しく、優しい顔立ちをしていた。だが記者の質問に丁寧ながらもはきはきと話す姿と、強い知性ある瞳は同時に彼女の頼もしさを視聴者たちに伝えた。

「殿下、よければクロエさんへのプロポーズの言葉をお聞かせ願えないでしょうか？」

記者の質問に王子とクロエは顔を見合わせ、どこか恥ずかしげに笑いあった。

「実は恥ずかしながら、私は過去に全部で3度、彼女にプロポーズの言葉を伝えているんです」

王子の言葉に婚約会見場がざわめいた。

「3度とは？」

記者たちは面白いエピソードの予感にメモを取る手を止めないながらも、王子の顔を食い入るように見つめる。

「一度目は私たちが6才の頃、クロエさんに大人になったら結婚しようね、と言ったんです。ですが大人になっても覚えていたら考えると返されました。思えばこれが私のはじめての挫折だったのかもしれません」

茶化した王子の言葉に、笑いが会場を包んだ。

会場の笑いが引くのを見計らって、王子は再び口を開く。

「二度目のプロポーズはもつと真剣なもので、クロエさんがアメリカ留学を決めた時、どうしても彼女を引き止めたく、彼女にプロポーズをしました。アメリカに行かずフィリピンにとどまり、私と結婚してくれないかと。ですがこれも彼女に断られてしまいました」

「クロエさん、どうして殿下の申し出を断られたのですか？」

記者たちの質問が今度はクロエに飛ぶ。

「もちろん王子のお申し出はとても嬉しかったです。ですが殿下も私も当時は18才でした。結婚の決断をするにはとても若く、そして私には外交官になりたいという夢がありました。異国の土地に移り住み、見聞を広めたいという思いも持っていました」

そう話すクロエの表情も王子の顔もとても穏やかだ。二人の間には困難があったのだろうが、すでにそれを乗り越え、幸せをつかんでいることが伺えた。

「父である国王陛下が病氣療養に集中されるようになった後、結婚に関することで考えることも多くなりました。周囲の方々に助言も多くいただき、悩むこともありました。私は過去に二度、クロエさんにふられています。ですがどう考えても、結婚相手はクロエさんしかいないと思いました。ですから半年ほど前、電話で彼女にフ

イリエに戻ってきてくれないかとお願いをしました。そして最終的に、クロエさんから承の言葉をいただきました」

「どうしてクロエさんしかないと？」

王子は記者たち、そしてテレビの前の視聴者たちの期待を裏切らなかつた。

「もちろん、彼女のことを愛しているからです。私の心は6才の時から彼女のものですから」

恥ずかしがることなく王子は言い切り、力強く微笑んだ。

『もちろん、彼女のことを愛しているからです。私の心は6才の時から彼女のものですから』

あきることなくテレビ番組は王子のその言葉を流し続け、女性キヤスターは興奮したようすでその言葉の解説をし続けている。

タカサ補佐官は入手したばかりの今日の夕刊紙を広げる。フィリ工で最も高い部数を誇る新聞社の見出しには『リアム王子から婚約者クロエさんへの最高の愛の言葉』という見出しをつけて、テレビ番組と同じことを報道している。この新聞社はタブロイド紙ではなかったはずだが、王子とクロエの馴れ初めを今世紀最高のラブ・ストーリーとして紹介している。

思わず笑ってしまったが、タカサにとっては都合がよかった。王子とクロエのカップルが国民からの支持を得ることは、今回の作戦に欠かせないことだったからだ。クロエを『本物の王子の婚約者』に仕立て上げることは作戦成功のために今は何より重要だ。

だがそれにしても、王子とクロエには驚かされる。

「何を笑っている？」

タカサに尋ねたのは自らの執務室でネクタイを緩めるリアム王子だった。婚約会見を終えた彼の表情に疲れは見えない。

「いえ、思っていた以上にお二人の演技力が優れていたのだから」

「私は婚約会見で嘘は何もついていないぞ。半年前にクロエに電

話でプロポーズした、ということ以外は」

「はい。わかっております」

タカサは笑顔で頷く。

「ところで殿下、クロ工嬢が婚約者としての勤めを無事に果たされた後は国民にはどう発表されるおつもりですか？」

「事の次第によるが、もちろん時期を待って事件内容は公表する。だがその発表は犯人逮捕後だ」

「いえ、そのことではなく、どのようにクロ工嬢との婚約解消を国民に告知するか、ということですよ」

王子はしばらく口ごもり、タカサから視線をはずした。常に真っ直ぐな王子らしくない反応だった。

「……………なぜ婚約を解消する必要がある。私たちの婚約は本物だ」
「クロ工嬢はそうは思ってたっしやらないと思えますが」

王子は溜息を吐くと、今度は顔を上げてタカサを見た。その顔はどこか恨めしそうでも、困っているようにも見えた。

「タカサ、お前もわかっていて言っているのだろう。もしそのことを本当に疑問に思っているのなら、昨日のうちにお前は私やクロ工に話していたはずだ。だがお前は言わなかった。つまり私とお前

は、同罪だ」

「クロエ嬢も、立場的に一度発表した婚約を取り消すことは難しいというのはわかっているかと思いますが」

タカサは自分のことについては否定も肯定もしない。

「そうだな、クロエもわかっているだろう。だがクロエなら、やってのける。婚約解消を。あいつは昔から嘘をつくのが嫌いなんだ。身分を隠さなきゃいけない捜査官なんてやっておきながらな」

「嘘から出たまことという言葉もございますよ、殿下」

溜息を吐く王子とは対照的に、タカサは楽観的だった。というより、彼はついでにこのままクロエと王子が結婚してしまえばいいと心底願っていた。王室関係者たちを悩ませていた王子の結婚問題が解決するし、どう婚約解消を発表すべきかと頭を悩ます必要もなくなる。

それに王子自身が言ったのだ。婚約会見で言ったことは一つを除いて真実だと。王子はクロエを嘘が嫌いな人間だと言っているが、タカサからすれば王子こそまさに嘘が嫌いな、つけない人間だった。

その時、軽いノックと共に婚約会見用のスーツからもっと楽なワンピースに着替えたクロエが入ってきた。王子は瞬時に顔色をいつものものに変える。

「殿下、実はナナザキ伯爵から私に会って話しが出来ないかと連

絡が来たのですが。伯爵とお会いしてもかまわないでしょうか？」

アビゲイルの父、ナナザキ伯爵は王子の手で保護され、王宮の一角でかくまわれている。娘の失踪、いや誘拐に心をだいぶ痛めている様子だがともかく無事だと王子はクロエに話していた。

伯爵はおそらく婚約報道を見たのだろう。彼が王子たちの作戦に気付いているのかはわからない。だが何かしら察しているだろう。そうなれば事件の関係人物の一人とはいえ、どこまで作戦のことを話しているのか、そこはしっかりと取り決めなければならない。だからこそ、クロエは王子に伺いを立てに来たのだ。彼女は自由に捜査をする権利があったが、この作戦のリーダーは王子である。

「そうだな……いいだろう。伯爵にはすべてを話そう。正直、伯爵からはすでに君に話した以上の情報を持っているとは思えないが、捜査官の君なら何か新しく気付くこともあるかもしれない」

「わかりました。このままナナザキ伯爵の所に行ってまいります」

一礼して踵を返そうとするクロエを、タカサが引き止める。

「お待ちください、クロエ嬢。もうすぐ『108作戦』がはじまります。殿下とご一緒にどのように報道されるか確かめられたらいかがでしょうか？」

笑顔のタカサに対して、クロエは顔をしかめた。正直、彼女はなんの冗談かと思った。常に自分や王子に対して丁寧な言葉遣いを忘

れないタカサだが、根は幼い頃から自分たちの面倒を見てきた『兄』である。しかもちよつと悪戯好きの。

だがここで怒っては負けである。それに癪ではあるが、タカサの言っていることは一理ある。彼が名づけた『108作戦』がどう影響するのか見届ける必要がある。

クロエは「わかりました。失礼します」と言うと、執務室に備え付けてあるテレビの前のソファ―に座った。

王子はタカサを睨みつけた。クロエの怒りを感じた若き王子の顔は「状況が悪化してくれたらどうしてくれる」と叫んでいた。

婚約会見前の最後の打ち合わせで、タカサ補佐官がある提言をした。

「もしクロ工嬢が警察官であることを犯人が知っていると仮定すれば、陽動作戦だと思われかねません。クロ工嬢が囷だと思破られる可能性が高い。ですからお二人には完璧なカップルを演じていただく必要があります」

完璧なカップルとはどういうことだと内心つつこみをいれながらも、クロ工はそのタカサの言葉には全面的に賛成だった。

正体不明のアビゲイル誘拐犯がクロ工の隠された職務を知っているとすれば、彼女を囷として犯人をおびき出そうとするこの作戦は効果的とはいえない。だがもし二人の婚約が本物だと思わせることができれば、話しは違ってくる。

「何か策はあるのか？タカサ」

「はい。殿下」

王子の問いかけにタカサは神妙に頷く。

「私が今考えられる、最も効果的な策です。すでに手を回しておりますので、殿下とクロエ嬢の了承さえいただければ、すぐに実行にうつせます」

『108作戦』を考えついたのはタカサだった。しばらく頭をめぐらせその作戦を了承したのはリアム王子であり、クロエもしぶしぶ頷いた。

そう、クロエはこの作戦に納得したのだ。頭では。だが感情はそうはいかない。

テレビの前に腰を落ち着けたクロエ、タカサ、そしてリアム王子はその速報を待った。

昨日からひたすら王子とクロエの婚約報道を流し続けている特別番組は、真実に限りなく近い嘘を放送し続けている。大学入学まで

同じ場所で遊び、学んできた王子とクロエには共通の思い出が多い。王子が6才の時、クロエにプロポーズしたという話も本当のことであつたし、二人は打ち合わせなしでもお互いの性格や経歴をそらんじることができる。

クロエはリアムのが好きだ。王子という立場を真摯に受け止め、立派に公務をこなす彼に敬愛の気持ちを持っている。王子もクロエのことを好きでいてくれるだろう。

でもクロエは思う。それは家族愛だと。

この婚約報道の中に嘘はただ一つ、二人が愛し合っている、という事だけだつた。

しかしタカサの立てた『108作戦』によって嘘は二つになってしまう。

『速報です。王室からの正式発表ではありませんが、リアム王子のご婚約者クロエさんが妊娠されているとのこと。病氣療養中の陛下に代わり、近日中の即位も噂されているリアム王子にお子さんが誕生すれば、未来の国王、女王の誕生ということになります』

クロエは軽く溜息を吐く。

女性アナウンサーが読み上げた速報に、彼女は嘘を重ねた罪悪感より、羞恥心がまさっていることを感じた。

クロエの深読みかもしれないが、同じ文面を繰り返すテレビの中のアナウンサーは動揺しているように見えた。昨今では正式な結婚の前に、カップルの間に子供が生まれることは決して珍しいことではない。だが王族の人間が当事者とあれば話は少し変わってくる。しかもリアム王子は大変クリンなイメージで通ってきた人間だ。そんな王子が結婚前に婚約者とはいえ女性を妊娠させたとすれば、ビッグ・ニュースである。

そしてその相手が自分なのである。婚約発表をするにあたって、クロエは両親に王子にプロポーズされ、それを受けたと伝えた。しかし妊娠のことまでは口にしていなかったため、今頃両親はひどく驚いているだろう。もちろん全部嘘なわけだが。

『108作戦』とはつまり、クロエの偽装妊娠である。彼女が王子の子を妊娠していると発表することで、クロエが本物の婚約者であると信じ込ませようというものだ。手際がいいもので、タカサがこの案を提案した時、すでに彼は産婦人科で発行されている医師の診断書も、クロエが三週間ほど前にアメリカの病院で妊娠の検査を受けた結果もすべて用意していた。そしてここ数ヶ月、クロエが頻繁にアメリカとフィリピンを往復していることを示す、出国と入国履歴も用意されている。誰かが見れば、彼女が王子との逢瀬のためにアメリカとフィリピンを行き来していると思うことだろう。そしてそ

の間に、子供が出来てしまったと。

何一つとして彼女に覚えはないが、誰かがそれを調べれば『本物』として証明されることになる。

「クロエ、すまないな」

そうクロエに謝罪したのは王子だった。すべてはアビゲイル奪還のためとはいえ、クロエの微妙な女心は彼にもわかるのだろう。

「女性としての名誉が汚されたと感じているのかもしれないが、すべての責任は私にある。どうか落ち込まないでくれ」

だが謝罪というより、なんだかんだめられているような気がする。クロエは若いが、特殊捜査官としては数年のキャリアを持つ。妊娠を偽装するのは確かにはじめてのことだが、任務とあればすべて腹をくくる形で今までもやってきた。だから王子がそんなふうに心配する必要はないのだ。

「いえ、そんな殿下が責任を感じることは

「何をおっしゃいますか！これはすべて殿下の不徳のいたすところですよ！！！」

自分の声をさえぎって鳴り響いた怒声に驚き、クロエが後ろを振り返ると、そこに初老の男性が立っていた。白髪を綺麗になでつけ

た彼は素早く王子に近づく。

「殿下、じいは悲しくてなりません！まさか殿下ともあるうお方が避妊を怠るとは！！しかもその事実をじいに話してくれないとは何事ですか！？」

怒りと嘆きを表す老人

リー侍従長はすっかり『10

8作戦』の影響下にあるらしい。

「リー侍従長、あなたに連絡が遅れたことは申し訳ない。だがこれはまだ父上や母上、女官長たちにすら話していないのだ」

突然のリー侍従長の訪れにも慌てることなく、王子は釈明する。彼が視線で扉の入り口を向けると、タカサが微笑んでいる。どうやら優秀な補佐官がリー侍従長を中に招きいれたらしい。

敵をだますにはまず味方から。

そんな使い古されたフレーズが王子の脳裏をよぎる。

「クロエ嬢、いやクロエさま！じいの目が行き届きませんで、ご迷惑をおかけしました。しかしこれからはこの私が全力を持ってお腹のお子様とクロエさまをお守りしますからご安心なされよ！」

リー侍従長はそこまで言うと、涙を流し始めた。

「クロエさま、このじいはわかっておりましたよ。クロエさまこそ、お妃となられる方だと。昔からクロエさまは殿下の一番のお友達でしたからな。それが愛情に変わるのは大変自然なことです」

うんうんと一人頷くリー侍従長にクロエは微笑を返すが、内心は苦笑いである。リアム王子の話によれば、リー侍従長はアビゲイルと王子の結婚を示唆していたという。それを思えば、クロエが妃になることがわかっていたとは、ずいぶんと調子がいい。しかも彼のせいでアビゲイルが誘拐されたのかもしれないことを思うと、何も知らずにいるリー侍従長に対してわだかまりの気持ちが生まれてきてしまう。

だがクロエは昔と比べてずいぶんと小さくなってしまった老人を憎むことができなかった。彼は王子らしかぬ『不祥事』に怒りを見せたが、涙をぬぐうその顔は心底二人の結婚と、プリンスかプリンセスの誕生に喜びを表していた。クロエと王子が偽りの関係であるということなど、想像もしていないらしい。思えば彼は昔から純朴だった。

リー侍従長はひとしきりクロエに喜びを伝え、王子の前に小言を並べると、満足したのか、仕事を理由に執務室を後にした。

「昔から裏表がない人間だとは知っていたが、ああも簡単に騙されてくれると心配になるな」

王子はリー侍従長が出て行った扉が完全に閉まるのを待って、口を開いた。侍従長は王子の幼い頃の教育係だったため、お互いに気が知れる存在だった。

今度こそ誰も執務室に入ってこないよう、タカサは鍵をかける。そして王子のほつを振り返った。

「そうですね。でも、リー侍従長がああいう性格ですから、今の殿下がいらっしやるのです」

「どういう意味だ？」

「殿下もとても素直な方でいらっしやいますから」

「……………ほめられたと思っておこう」

王子は無然とした顔を隠さず、クロエは思わず笑った。

「この女、警察官なんだろう？」

「はい。国外逃亡をした指名手配犯の情報収集、またフィリピン家警察の捜査員として国際警察^{インターポール}への出向もしているようです。どちらも身分を隠しての行動ですが」

「国際警察官のおでましか……………」

ビジネスマン風の男は部下から報告を受けていた。一般企業ならどの会社にもありそうな会議室には男とその部下の二人しかいない。彼らの前にはフィリピン第一王子リアムの婚約報道を流し続けるテレビがある。そしてその報道は王室からの正式発表はまだと付け足しながらも、さも真実であるかのように婚約者クロエの妊娠を伝えていた。

「本当だと思うか？」

「病院の診断書から判断すれば、クロエ・クワンポンの妊娠は本物です。ですが、リアム王子や警察官であるというクロエ・クワンポンであればいくらでも偽造はできましよう」

部下の手にはクロエが病院で妊娠検査を受けた結果が記された、病院の公式の診断書がある。もちろん彼は本来ならばこれを手に入られる立場にはない。

「しかし、リアム王子とクロエ・クワンポンが親密な関係にあっ

たということとは真実のようです。彼女がアメリカに旅立つ前に二人は一度、性的な関係を持っています」

「……………そうか」

男は会議室の窓のブラインド越しに、白亜にそびえる王宮を見た。

「偽者だろうと本物だろうと、我々がすることは同じだな」

それは行動の決行を意味していた。

「はい」

部下は頷くと、男より先に部屋を出て行った。上司の望みを叶えるために。

真夜中の闖入者

アメリカからの急な帰国に、アビゲイルが誘拐されたという事実、王子の婚約者役を演じた今日の会見。警察官として体を鍛えているとはいえ、さすがのクロエも疲れを感じ、大きめのベッドの上に体を投げ出した。

クロエのために用意された王宮の客室は華美すぎない、品の良いインテリアでまとめられている。部屋に置かれた調度品はどれもシンプルだが、一つ一つはどれも大変価値があるものだ。

そしてクロエの好きな水色で部屋全体がコーディネートされている。王子がクロエの好みの色を考えてこの部屋を用意してくれたのかはわからないが、きっとそうなのだろう。

王子はちよつと真面目すぎるくらいがあるが、基本的に気が利くし、誰にでも優しい。それはたった一人の子供としてふんだんの愛情を国王夫婦から受けると共に王子として清廉に、時に厳しくしつけられた結果だとクロエは思う。現在、病氣療養のために保養地として有名なカスガラ島にいる国王とその妻である王妃は、王宮を立派に守っている王子を誇らしく思っていることだろう。

その想いはクロエも同じだった。

そしてこの気持ちを共有しているのはクロエだけではない。

クロエは先ほど、アビゲイルの父、ナナザキ伯爵と顔をあわせ、これから彼女たちが行おうとしていることを包み隠さず話した。伯爵はまずクロエを婚約者に仕立て上げた今回の作戦内容に驚いた。

娘を必ず取り戻せる確証はどこにもないというクロエの正直な説明には激昂することなく、何一つとして文句は言わなかった。ただ娘を頼みますと、頭を下げるのみだったのである。娘の失踪から一ヶ月がたち、クロエたちしかすぎる者がいないという気持ちがあるのかも知れない。だが伯爵にそんな姿勢を取らせた一番の理由は、彼が王子を信じているからだ。自分の娘とさして年の変わらない男を伯爵は信じているのだ。

クロエはそんな想いを守りたかった。

誰かに王子に対する失望の気持ちを持たせてはならない。

クロエは俊敏に体を起こし、すぐ近くにあつたベッドランプを寝室の侵入者に投げつけると、懐に入れていたものを素早く取り出す。美しい模様が描かれていた陶器製のランプが音を立てて壊れた。

「手を上げなさいっ！！！」

銃口はしっかりと侵入者に向けられている。クロエが投げつけたランプが脇腹をかすったのか、侵入者はお腹を抱えていた。だが身の危険を感じてすぐに両手を挙げる。

「両手はそのまま、両膝を床につきなさい」

クロエは侵入者にそう命じながら、就寝のために薄暗くしていた

部屋の照明をすべてつける。

暗がりでも男だとも女だともわからなかった真夜中の闖入者の顔が明らかになる。

クロエは侵入者の正体に目を丸くし、それから愛用の小型拳銃を下ろした。

「……………ジエイ、驚かさないで」

ベランダからクロエの寝室に忍び込んできた男はクロエがよく知る男だった。

「お前、あのランプものすごい重かったぞ。絶対に俺の脇腹おかしくなった」

自身が銃口の的から外れ、安心したのか男は痛む脇腹を押さえて床に転がった。フィリイ人には珍しい薄い茶の髪と瞳を持つ男は「あゝ痛い痛い」と大げさに騒ぐ。

「だいたい妊娠初期なんだから、激しい運動は禁物だぞ」
「タカサ補佐官に頼まれて、私の診断書や出入国履歴を作ったのはあなたでしょう」

男の擲揄をクロエはぱっさりと切り捨てる。

「それが俺の仕事だからな」

にやりと男は笑って、「よっこらしよ」と床にあぐらをかいた。どうやら彼はここにしばらく居座るつもりらしい。

一体、どういふつもりで勝手に部屋に入ってきたのか、クロエは男に聞いた。だそうと思った時、廊下をばたばたと走る一人分の足音が聞こえてくる。しかもその音はこちらに近づいてくる。ベランダからの訪問者に、きつとこの部屋にかけてあつた防犯装置が作動しそれに気づいた宮殿兵が駆けつけてくれているのだらう。一般兵はクロエが警察官であることを知らないし、王子との婚約がアビゲイルを誘拐した犯人を捕らえるための作戦であることも知らない。しばらくすれば複数の兵がやってくるはずだ。

王子の婚約者の寝室に、見知らぬ男が忍んできている所を彼らが見たらどう思うだらうか。しかもクロエは平然としているのだ。クロエが襲われている場合はまだ言い訳がきくが、ベッドランプが一つ壊れた以外、この部屋は平穩そのものだ。どうしたものかと頭をめぐらせた時、寝室の隣の応接間の扉が開く音がし、そしてこの部屋の扉が激しく叩かれた。

「クロエっ！どうした！？何があつた！？」

この宮殿内には現在、リアム王子以外に彼女を呼び捨てる存在はいない。

彼女は扉を素早く開け放った。

「殿下、私は無事です。後ろからくる兵は下がらせてください」

クロエはそう言うと、視線で寝室の中にいる男を見ると促す。

王子は男の存在に視線を鋭くしたが、寝室の中を一度見回すと、「私が戻ってくるまでこの扉は開けなくていい」と言って扉を閉めた。

その後すぐに王子に遅れてやってきた王宮兵と王子の会話が、寝室の扉越しに聞こえてくる。どうやら兵たちはクロエの安全を自分たちの目で確認したいらしいが、王子の言葉にしばらく応接間の外での待機をすることを納得したらしい。

兵たちを追い払ったリアム王子はそのままノックなしに、寝室の扉を開ける。王子がノックもなしに扉を開けるのを、クロエは始めて見た。だがそんなことはどうでもいいことだ。クロエは小さな驚きを捨て、平静を装った。

「殿下、お騒がせして申し訳ございませんでした。それとベッドランプを一つ、壊してしまいました」

王子はちらりと陶器で出来た胴部分が壊れたランプに視線をやる。

「問題ない。それよりクロエ、本当に怪我等はしていないんだな？」

「はい」

「では、この男は誰だ？」

王子の視線が薄茶の髪の男に向けられる。警戒しているというように、なんだか怒っているような雰囲気醸し出す王子を前にして、男は脇腹の痛みを忘れたかのように素早く立ち上がる。

直立に立ち上がった男は驚くほど背が高い。リアム王子も背が高いほづだが、彼の身長は抜きん出ている。

「ご挨拶が遅れて申し訳ございません、リアム王子殿下。フィリ工国家警察特別捜査課のジェイ・ウィルソンです。クワンポン捜査官が所属するチームのリーダーを務めています。タカサ補佐官からの要請を受けて、今回の事件の捜査に協力させていただくことになりました」

王子にしては珍しく、びしりと敬礼をするジェイを上から下まで不躰なまでにしっかりと眺める。クロエたちより年上であろうジェイは人懐っこい笑顔を浮かべているが、その身長の高さと、大柄な骨格は人に威圧感を与えることが多い。だが頭一つ分、自分より背の高い男を前に、王子は顔色をまったく変えなかった。

「なるほど、クロエの上司ホスですか。」

クワンポンさんはベランダから君を訪ねてきたようだが、それが最近のフィリ工警察の礼儀なのか？」

「もちろん違います！」

聞かれてクロエは思わず力いっぱい否定した。深夜に騒ぎを起こしたことを怒っているのだろうが、王子の顔がいつになく怖いのだ。始終笑顔でいる王子ではないが、それでも普段温厚な顔を見せてい

る人間が怒っている姿というのは、それだけで心臓に悪い。

リアム王子は溜め込んでいたものを吐き出すかのように息を吐くと、右手でくしゃりと整えられた髪を乱しながら苦笑する。

「すまないな。今の発言はウイルソンさんにもクロエにも無礼だった。どうやら自分で思っているよりも私は疲れているらしい。」

それでウイルソンさん、わざわざ王宮にいらしたということとは何か報告がありなのでしょう？聞いても構わないですか？」

「はい。まず、簡単に私が『殿下のご婚約者』の寝室に簡単に入る警備体制は問題かと」

ウイルソンは王子の言動に対して特別な反応はしない。ただそう、まるでタカサのようなすべてを隠す笑顔を浮かべているだけだ。

「アビゲイルが誘拐されてから、宮殿の警備はだいぶ強化されたはずだが、まだまだ穴があるらしい」

王子は溜息を吐く。

ジェイにあっさりと警備を突破されたからには、責任者を交えてさらなる警備強化を目指さなくてはならない。

「それから宮殿北の王子宮に爆弾が仕掛けられていましたが、処
理済です」

その報告にはっとクロエと王子の視線が、ジェイに集まる。

「王子宮のどこで爆弾を発見したの？」

クロエは自分の考えが当たっていることを予想、いや期待した。

「ゲスト・ルームがある三階のフロアに。計三つ仕掛けられていました。一つ一つの威力は小さいタイプのもですが、人が近くにいれば怪我ではすまないものです」

ジェイの言葉に王子は軽くうなり、クロエも難しい顔をする。

『**『 眞実の花嫁』**』という罠に敵がひっかかった。

だがこの罠トラップの成功は同時に、王子のすぐ近くに敵の手があることを明らかにしたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7881p/>

The Prince and an Officer

2011年10月8日02時28分発行